

オースターの「幽霊たち」

(音信不通 ②)

奈良 敏行



ソローの『ウォルデン』（「森の生活」）を読むシーンが、ポール・オースターの小説『幽霊たち』にあるよ、と啓三さんが教えてくれた。啓三さんは若いときからアメリカで暮らし、アメリカの女性と一緒にいた。多言語話者なのだ。独特のことは感覚があり、私にはとても魅力的な存在だ。『幽霊たち』は新潮文庫に入っていて、さっそく読んだ。解説の三浦雅士が「なにか暗く深い奥行きがある」と本質を言い当てている。同様の「奥行」が啓三さんのことばにもいつも感じられる。ここでポール・オースター

ーが言いたいことは、「我々は我々の真の場所にはいない」という発見だ。しかしこれは、「自由」の別の言い方でもある。

オースターのソローの読みは面白い。「森の中で一人きりで暮らそうなんて、何だかってそんなことをしたいと思うんだ？」わたしも読みながら少し退屈だった。でもページを重ねるとふと気づいた。オースターも同じことをいつている。「彼（ブルー）は一挙に理解する。こいつはゆっくり読むことなのだ」

ゆっくり読む。一日数ページだけ。そういえば、『幽霊たち』にはあまり水の気配を感じなかった。ソローはいう、一人きりになるとわかる、地面は水に浮かんでいるたよりのないものだ。都会の中で時間に追われ、一人きりになった主人公のブルーはかわいそうだ。自然と出合うために後どれだけの孤独が必要なのだろう。

結川真悟さんは、『ともに創る！ まちの新しい未来』（早稲田大学出版部）という本を貸してくれた。「『震災後』に考える」というブックレットシリーズの一冊だ。私は熱中するとエンピツで線を引かないと本が読めない。すでにもう返せない状態になっているが仕方がない。定有堂でも小冊子を作っている。HPに連載して下さっている「読む会」選書係の岩田直樹さんの文章を、一年ごとに、

ドラマリアさんが編集製作してまとめている。今年のタイトルに『多様性とレジリエンス』とあった。この言葉を自分の中心にすると、最近考えていることに一本背骨がとおるのに驚いた。自分では「七転び八起き」と解釈した。春からこの「レジリエンス」をテーマとして考えつつづけている。

結川さんのブックレット（彼も学生として参加している）には、たくさん学ぶものがあつた。レジリエンスについての理解とそこからの出口としての対処法だ。

わたしの常用しているリュックには故あつて陰陽マークがぶら下げてある。身体操作としての太極のアイコンに興味があるのだ。気づいて結川さんは「陰陽」いいですね、といった。生きる場を「循環サイクル」つまり「栄枯盛衰」のくり返しと知ることが重要なのだ。ブックレットの指摘だ。いまつらくても、この場がいずれ変化するのなら耐えられる。易の思想で語られる龍の昇降の往来と同じ認識だと思つた。

もう一つは、やはりブックレットの教える『ナラティヴ・アプローチ』（野口裕一・勁草書房）を典拠とした、人とかかわり方だ。オースターのブルーも、いわば「物語」に閉じ込められていく悲しい男だ。「ドアがばたんと閉まるように、一瞬のうちに、取り返しのつかない認識が

彼を襲つた」。ナラティヴの考え方は、芥川の「藪の中」を思い浮かべればいいが、しかしここでは、複数の「語り」の中で、唯一の物語を求めない。物語の併存をそのまま受け入れる。「世のなかわからないことだらけだね」で、一歩前へ進む。

「学び」の根幹としての七転び八起きの糸口である「レジリエンス」というアイデアが、このようにしてするすると解きほぐされていくのを体感した。結川さんとの出合いのおかげだ。

人は固定観念をもつて生きる。それをオブセッションと呼ぶ。自分が自分であるゆえんだ。わたしのオブセッションはこんな形をしている。「森の生活者」のウォルデン池に面したカウンター席にいたとき、左に若桜橋が見えた。八月にめずらしい曇天の昼下がりがだった。昔読んだマヤコフスキーの詩の一節が浮かんだ。たぶんネヴァ河だ。もう若くはない一人の男が橋上にいる。大雨の後だろうか、河は急流になっている。ふと見ると若い男が青ざめた顔で流されてくる。橋上の男は、それが若い日の自分だと気づく。

「おお…」と心に叫ぶ。それからどうしたのだろうか？ 記憶の改変が多く真実はたぶんそうではない……。ともあれ流される私を橋の上の私が見る。そして、それを「森の生活者」の片隅で、クルミのベーグルを食べながらわたしし

が見ている。その三人目の私にナラティヴ・アプローチがある。

オースターのブルーのように、人は「物語」に閉じ込められる。「物語」の言葉は、既知強制をする。オブセツシヨンのなかにあるとき、言葉と現実がそこをきたす場合、きまつて「言葉」が正しい。まだ行われていないだけだ。知つて以上知つてる限り知りえない。現実に出合うことがない。しかし「物語」を物語る「物語」がここにあれば、この球体はドアをひらく。そう思いながら「ワイルド」のそぞがれたコーヒーカーップを口にはこぶ。

定有堂の店内の死角に突如あらわれる、中腰でなければくぐれない、二階へのにじり口を通り抜けながら、結川さんは、「秘密基地」の入口だ、と笑った。じつはわたしも、いずれこの秘密基地ということばで何かを語ろうと漠然と考えていた。しかし、ふと気づいた。すでに語りはじめていることに。この小冊子の「音信不通」というタイトルの下にぶら下がっている小文字、ビオトープという言葉が、じつは「秘密基地」の別の名乗りだったのだ。

2016.8.22

(参考)

ポール・オースター 『幽霊たち 改版』 新潮文庫 2013

沼田慎一他 (編著) 『ともに創る！ まちの新しい未来』

早稲田大学出版部 2016

野口裕一 『ナラティヴ・アプローチ』 勁草書房 2009